

報告

**痛みを表現する言葉の理解に関する調査
～医療系専門学校在学中の学生における男女比較～**

泉 恵理子^{1,2)}、智原 栄一³⁾

1) 平成医療学園専門学校 鍼灸師科 2) 明治国際医療大学 大学院 修士課程

3) 朝日大学歯学部 麻酔学教室

**Investigation on vocabulary of medical care students about pain symptoms
～the comparison between men and women in the student of medical vocational school～**

IZUMI Eriko^{1) 2)}、CHIHARA Eiichi³⁾

1) Department of a practitioner of acupuncture and moxibustion , Heisei college of medical technology

2) Graduate School of acupuncture and moxibustion, Meiji University of Integrative Medicine

3) Department of Anesthesiology ,Asahi University School of dentistry

【要旨】

【目的】

痛みは主観的なものであり、自分が経験したことの無い痛みを想像することは第三者にとって難しく、年代、性別、経験などで差異を持つことが考えられる。また、女性にとって“月経”に関連した痛みは日常的であり、男性治療者も臨床を行う上で理解する必要があると思われる。医療系の専門学校に在学中の学生を対象に、生理痛を含めた痛みの性質の表現や部位などに対する理解について調査し検討した。

【方法】

医療系の専門学校在学中の1年生と3年生で、本調査に同意した674名を対象にアンケートを行った。質問紙は、無記名で直接配布して回答を得た。質問内容は、痛みの言葉の理解、5つの有痛症状をイメージする言葉と部位の理解について行った。痛みを表現する言葉は『簡易型 McGill 痛みの質問表 (SF-MPQ)』の表現を用いた。結果はクロス集計を行い、各質問回答の内容を男性と女性で比較した。

【結果】

“生理痛”は「重苦しい痛み」男性 11.8%、女性 26.2%、「その他」の割合が他の疾患より少し多く、全体的に回答のバラつきが認められた。部位は、「下腹部」(男性:52.8%、女性:81.7%)、「腰部」(男性:7.6%、女性:9.5%)と男女で大きな差異はなかったが、男性の「無回答」が35.8%と多かった。“腹痛”について、男性「しめつけるような痛み」19.8%、女性「突き刺されるような痛み」20.6%、部位は、女性「上腹部」(53.2%)、男性「下腹部」(52.5%)の割合が多かった。“腰痛”は「ギクッと走るような痛み」男性 41.8%、女性 37.3%であったが、女性は男性と比べて、「重苦しい痛み」の割合が多かった。イメージが難しい言葉は、「恐ろしくなるような痛み」の割合が最も多く(男性 31.9%、女性 31.3%)、次いで「耐え難い、身のおきどころのない痛み」であった。

【考察及び結語】

痛みを表現する言葉の理解は『簡易型 McGill 痛みの質問表』を用いたが、これらでも理解できないという回答がみられたことから、学生の痛みを表現するボキャブラリーが少ないこと

が考えられた。また、特に男性は経験したことの無い“生理痛”をあまり進んで理解しようとし
ない傾向がみられ、これらが他の有痛症状に対しても誤診を招く可能性があることが示唆され
た。これらを考慮した臨床教育を行っていくことは、今後の課題であると思われる。

キーワード：痛み、理解、簡易型 McGill 痛みの質問表、性差、生理痛

【はじめに】

痛みは患者が治療院を訪れる動機のうち最も主要なものである¹⁾。

医療に従事するものが臨床において、痛みの種類や部位、経過などから、その緊急度や治療の対象とならないような重篤な疾患を鑑別することは最も重要だと思われる。しかし、それらを鑑別したうえで痛みの治療で重要となるのが、痛みの共感と理解であると思われる。痛みは主観的かつ複雑なものであり、自分が経験したことの無い痛みを想像することは第三者にとって難しい。患者の表情や動作、痛みの表現から痛みの程度を推測することは可能であるが、痛みの表現に使用される言葉が年代、性別、経験などで差異を持つことも考えられる。

それらがどの程度で、どのような傾向があるかの現状を知り、教育に取り入れることは医療教育に重要であると思われる。

今回、医療系の専門学校に在学中の学生を対象に、痛みの性質の表現や部位などに対する理解について調査し、男性と女性で比較検討した。

【方法】

1. 対象と調査

医療系の専門学校（柔道整復師科・鍼灸師科）に在学中の学生で、本調査に同意した 674 名を対象に、同校の倫理審査を得てアンケートを行った。2010 年 2～3 月に同様の調査で、痛みの理解が学校教育の過程でどの程度影響を与えるか、学生の臨床経験（実技授業の修得や治療所での就労経験など）が、痛みの理解にどの程度影響を与えるかを比較するために、1 年生と 3 年生の学生を対象とした。よって、今回も同様に 1 年生と 3 年生の学生を対象とした。

* 図表は、論文の最後に掲載。

2010 年 2 月～5 月に各クラスの教室で、無記名による質問紙を直接配布し、約 15 分で回答させその場で回収した。

アンケートは『簡易型 McGill 痛みの質問表 (SF-MPQ)』を元に、アンケートおよび部位選択用紙を独自に作成した (図 1)*。質問内容は、回答者プロフィール (所属学科・学年・クラス・性別・年齢・最終学歴) と、痛みの理解 (言葉の理解・5 つの有痛症状の経験の有無と、それらの症状に対する痛みのイメージ) で行った。

有痛症状は、平成 22 年の国民生活基礎調査²⁾による有訴者の自覚症状が多いことから、臨床で遭遇する可能性が高いと思われる「腰痛」「肩こり」、経験の有無による差異を調査するために、男性が経験することのできない痛みとして「生理痛」、生理痛の症状と比較できるものとして「腹痛」、体幹部以外で自覚症状が多いと思われる「頭痛」の 5 つとした。

『簡易型 McGill 痛みの質問表 (SF-MPQ)』は、痛みの強さを 0～3 の 4 段階で回答するものであるが^{3) 4)}、今回の調査では痛みを表現する言葉の状態をイメージ (想像・理解) できるかについて質問しているため、学生が回答しやすいように「できる」「なんとなくできる」「あまりできない」「できない」で回答させた。

5 つの有痛症状は、症状の経験の有無を「ある」「ない」「経験はないが症状のある人 (患者以外) と身近によく接している」の 3 件法で、イメージされる痛みの表現・部位については順位法を組み合わせた限定回答法を用いた。“頭痛”は痛みを表現する言葉のみの回答とし、イメージされる言葉の表現については経験の有無に関わらず回答するように説明した。痛みを表現する言葉は『簡易型 McGill 痛みの質問表 (SF-MPQ)』の表現を用いた。

結果はクロス集計を行い、各質問回答の内容を男性と女性で比較した。

【結果】

674名のうち、最後の質問まで回答していたものは663名(男性524名、女性126名、不明13名、平均年齢 28.3 ± 7.5 歳)であった。男性と女性の2群で比較したため、663名のうち性別が未記入であった13名を除外すると、有効回答率は96.4%(650/674名)であった。

1. 痛みを表現する言葉の理解

痛みを表現する言葉の理解について調査した結果を、表1に示す。男女共に特に「できる」の割合が多かった言葉は、「ズキンズキンと脈打つ痛み」(男性76.3%、女性81.0%)、「さわると痛い」(男性80.9%、女性79.4%)であった。

「できない」の割合が最も多かった言葉は、「恐ろしくなるような痛み」(男性31.7%、女性22.2%)で、「あまりできない」と回答した割合を合わせると、男性:72.9%、女性:61.1%であった。次に多かったのは「耐え難い、身のおきどころのない痛み」(男性24.4%、女性17.5%)であった。

感情を表す言葉の「できる」と「なんとなくできる」を合計した割合は、「心身ともうんざりするような痛み」(男性49.4%、女性65.9%)、「気分が悪くなるような痛み」(男性72.7%、女性80.1%)、「恐ろしくなるような痛み」(男性27.1%、女性38.9%)、「耐え難い、身のおきどころのない痛み」(男性46.2%、女性55.5%)であった。

2. 有痛症状に対する痛みのイメージについて

各症状に関する経験の有無についての結果を、表2に示す。

(1) 肩こり

イメージする表現の言葉についての結果を図2に、部位を図3に示す。イメージされる言葉で最も多かったのは男女共に「重苦しい痛み」(男性:46.8%、女性:52.4%)であった。部位は「後頸部」(男性:52.6%、女性:54.0%)が最も多く、次いで「肩甲間部」の割合が多く、男女で大きな差異はなかった。

また“生理痛”を除き、他の症状より男性の「経験なし」の割合が17.9%と多かったが、「無回答」の割合が言葉3.2%、部位3.1%と「経験なし」と回答した割合より少なかった。

(2) 頭痛

イメージする表現の言葉についての結果を図4に示す。男女共にイメージされる言葉は「ズキンズキン脈打つ痛み」(男性:70.0%、女性:79.3%)が最も多く、他の症状と比べて他の言葉を選択する割合は非常に少なく、ほとんどバラつきは認められなかった。

(3) 生理痛

イメージする表現の言葉についての結果を図5に、部位を図6に示す。生理痛をイメージする言葉として女性は「重苦しい痛み」(26.2%)が最も多く、次いで「しめつけるような」、「うずくような」で、これらを併せると61.1%であった。部位は「下腹部」が81.7%であった。女性と比較すると、男性はイメージする言葉に多様性が示されたが、部位は女性と同じく「下腹部」が52.8%と最も多かった。また、「無回答」の割合が、言葉の表現では35.8%、部位は34.7%であった。

(4) 腹痛

イメージする表現の言葉についての結果を図7に、部位を図8に示す。割合が多かった言葉は、男性は「しめつけるような痛み」(19.8%)、女性は「突き刺されるような痛み」(20.6%)であった。部位は女性では「上腹部」(53.2%)、男性は「下腹部」(52.5%)の割合が多かった。

(5) 腰痛

イメージする表現の言葉についての結果を図9に、部位を図10に示す。最も割合が多かった言葉は、「ギクッと走るような痛み」(男性:41.8%、女性:37.3%)であった。また、女性は男性と比べて、「重苦しい痛み」の割合が多く、「重苦しい痛み」(33.2%)と「ギクッと走るような痛み」(37.3%)との割合に大きな差が認められなかった。部位は男女ともに、「腰部」(男性:84.4%、女性:88.9%)が最も多く、次いで「臀部」、「大腿後面」がほとんどを占めていた。

3. イメージ(想像・理解)しにくい痛みの表現について

結果を図 11 に示す。

【考察】

McGill 痛みの質問表 (McGill Pain Questionnaire: MPQ) は、1975年にマクギル大学の Melzack により発表された痛みの質問表である。^{3) 4)}

平川は⁵⁾、「痛みは複雑な体験であり、痛みの強度だけでは、その内容を十分に表現することは困難であり、MPQ は痛みの評価に心理的な影響を考慮して作成されたものである。MPQ は質的、量的な多様性を持った痛みの評価法として有用であり、臨床で広く使用されているが、分科や言語の違いにより、表現法も異なることが問題となる。本邦でも日本語版が作成されて普及している⁶⁾。しかしながら、選択肢が多く、実施に時間がかかるため、一般臨床よりもむしろ臨床研究に使用されることが多い。MPQ の信頼性、妥当性については、多くの研究が行われ、評価されている。MPQ の実施には時間を要するため、実際の臨床の場では使用できないこともあり、Melzack 自身により改良されたのが、簡易型 McGill 痛みの質問表 (Short-Form McGill Pain Questionnaire: SF-MPQ) である⁷⁾」と述べている。

簡易型 McGill 痛みの質問表 (SF-MPQ) は、痛みを表す言葉 15 (1. ズキンズキンと脈打つ痛み (throbbing)、2. ギクツと走るような痛み (shooting)、3. 突き刺されるような痛み (stabbing)、4. 鋭い痛み (sharp)、5. しめつけるような痛み (cramping) 6. 食い込むような痛み (gnawing)、7. 焼け付くような痛み (hot-burning)、8. うずくような痛み (aching)、9. 重苦しい痛み (heavy)、10. さわると痛い (tender)、11. 割れるような痛み (splitting)、12. 心身ともにうんざりするような痛み (tiring-exhausting)、13. 気分が悪くなるような痛み (sicking)、14. 恐ろしくなるような痛み (fearful)、15. 耐え難い、身のおきどころのない痛み (punishing-cruel)) について痛みの強さを 0~3 の 4つの段階で回答するものである。ま

た平川は⁵⁾「痛みを表す言葉のうち 1~11 は感覚を表しており、12~15 は感情を表す言葉である。SF-MPQ は質問に答えるのに 2~5分程度で簡単であるが、通常の MPQ との相関係数は高く、Visual Analogue Scale(VAS)よりも多くの情報を得ることが可能である。」とも述べている。MPQ および SF-MPQ に関しては日本語版が広く使用されている^{4) 8)}。慢性痛患者での研究で、日本語版 SF-MPQ の信頼性が評価されており、痛みの評価法として有用であると考えられている。^{9) 10)}

痛みの評価に関する論文は MPQ を用いたものも含め多数みられるが、特定の疾患や症状の評価に関するものが多く、痛みを表現する言葉の理解に関するものはほとんどみられない。言葉の意味や理解は、誰もが同じではなく、社会的・文化的な影響を受け変化する。それらの現状を認識することは、臨床においても重要であると思われる。また有痛症状では、月経痛を評価したものが、柳堀らの¹¹⁾ アンケート調査による報告などで散見されるが、基本的に女性を対象としたものであり、男性が月経痛についてどの様に考え、理解しているのかを調査したものはみられない。月経痛は、月経困難症や子宮内膜症などの基礎疾患に伴う症状である場合を除き、疾患ではなく女性の日常生活の症状の1つであることから、鍼灸治療などの代替医療の対象となりやすい。これらの治療にあたる者には、男性も多くみられることから、男性はこれらの症状についてどの様にとらえているのか、また女性はどうのようにとらえているのか、それらの差異はどの様なものなのかを知ることが必要であると思われる。

我々は 2010年 2~3月にこの質問紙を用いた同様の調査を行い、医療系の専門学校に在学する 1年生と 3年生を比較検討したが、すべての結果において大きな差異は認められなかった。このことから、学生時の臨床経験は、痛みの理解には大きく影響を与えないことが考えられた。

痛みを表現する言葉の理解について、『簡易型 McGill 痛みの質問表』の 15語を用いて回答を得た。これらは臨床で痛みを表現する言

葉としては少ないボキャブラリーであると思われるが、それでも「理解できない」と回答した表現がみられたことから、学生が痛みを表現する言葉のボキャブラリーは、非常に少ないことが考えられた。特にこの傾向は、女性より男性に、感覚より感情を表す表現にみられた。ボキャブラリーが少ないということは、その症状を大雑把にしか捉えていないということである。これらをどのように克服し、ボキャブラリーを増やしていくかは、今後の教育の課題の1つである。

症状別に検討した結果からも、理解できない痛みの症状があることが明らかになった。経験したことのない(できない)痛みを理解する方法を模索することが今回の調査の目的の1つである。“生理痛”は男性が絶対に経験できない痛みであり、この典型的な例である。今回の調査では、症状の経験の有無に関わらず回答する方法を用いたが、“生理痛”の項目では男性の「無回答」の割合が他の症状と比べて明らかに多く、「経験のしたことのないものはわからない」「回答できない」と、理解することをあきらめてしまう傾向があることを示しているのではないと思われる。これは、他の経験のない症状でも、同じように理解することをあきらめてしまう可能性があるということをも示唆するものである。誰でも経験したことのない痛みがあるのは当然であるが、経験がないから無理なのだといって理解することをあきらめてしまうことは、医療者として臨床において望ましくないことであると思われる。

経験があることは、痛みの理解と共感において最も重要な要素であると思われる。しかし今回の調査では、“肩こり”は“生理痛”を除き、他の症状より男性の「経験なし」の割合が17.9%と多かったが、痛みのイメージ(言葉と部位)で「無回答」の割合が「経験なし」の割合より少なく、これは他の症状では認められない結果であったことから、“肩こり”は経験の有無に関わらず理解できる、理解しようとしている症状であると思われる。これらより、経験の有無は重要であるかもしれないが、単に経験の有無だけが痛みの理解と強く

関連しているわけではない事が考えられた。武谷は¹²⁾、「生理現象の中で月経ほど男女間での理解がかけ離れているものはない。」「人類社会において月経ほどタブー視されてきたものはない。」と述べている。“肩こり”のように、臨床でよく遭遇する疾患であれば、医療者として経験の有無にかかわらず理解しようとするが、“月経”というような日常的に性を意識させるような症状は、医療者であっても異性があまり深く関与してはいけなく、すべきでないという意識があるのかもしれない。男性で“生理痛”について回答した者は、経験することができない痛みであっても、「理解しようとした人」であると考えられる。これらの回答を男性と女性とで比較すると、内容やその割合に大きな差はみられず、男女でそれほど大きく理解がかけ離れていることはないと思われた。これらのことより、自分が経験していない痛みでも、表現や部位はなんとなく理解できる、正しい推測を持つことが可能であると思われる。

だが、詳細に比較検討してみると、言葉や部位について“腰痛”と“腹痛”で少し差異がみられた。“腰痛”を表現する言葉のイメージは、男性・女性ともに「ギクッと走るような痛み」の割合が最も多かった。しかし、女性では「重だるい痛み」という表現の割合も多く、「ギクッと走るような痛み」と「重だるい痛み」の2つの言葉の割合にはあまり差が認められなかった。「重だるい痛み」は、今回の結果から、“生理痛”をイメージする言葉でもあった。女性は男性と比べて“腰痛”に対するイメージが多様であり、“生理痛”を“腰痛”の症状として表現する人がいることがうかがわれた。“腹痛”に関して、男性は「しめつけるような痛み」「突き刺されるような痛み」と「下腹部」、女性は「突き刺されるような痛み」「しめつけるような痛み」と「上腹部」の割合が最も多かった。“腹痛”の出現部位に関して、男性は“生理痛”と“腹痛”は同じ「下腹部」であるのに対し、女性では“生理痛”と“腹痛”で異なり、“生理痛”は「下腹部」、「腹痛」は「上腹部」に症状が出現するイメージであるという結果であり、男女で理解の違いが認められた。

これらは、男性（治療者）は、臨床において女性の“腰痛”を扱うときに、“生理痛”の可能性を見落とす可能性が高いことを示唆している。つまり、“月経”や“生理痛”の理解を敬遠していることが、“腰痛”の診断能力を低下させる可能性につながることを考えられる。“生理痛”は男性にとって理解することをあきらめてしまいがちな症状の1つであるかもしれないが、このことがそれらと関連のある他の症状に対しても誤った捉え方をする可能性を含んでいることが考えられた。また、女性（治療者）は、自分の経験から“下腹部痛”を“月経”と結びつける傾向が強いことが考えられた。経験があると、その経験に判断が影響を受けてしまう可能性がある。経験がない場合でも、知識を得る（理解する）努力が必要であり、また経験があるからといって決めつけすぎてもいけないことが考えられた。これらの点を医療教育の段階で学習者に認識させることが、今後の重要な課題であると考えられた。

【結語】

痛みは患者が治療院を訪れる動機のうち最も主要なものであり、痛みの種類や部位、経過などから、その緊急度や治療の対象とならないような重篤な疾患を鑑別した上で、痛みを理解し共感できることは臨床にとって必要不可欠なスキルであると思われる。

医療系の専門学校在学中の学生といったまだ臨床経験が浅く若い医療者は、『簡易型 McGill 痛みの質問表』の15語ですら理解できない表現があり、痛みの表現のボキャブラリー（語彙）が少ないことが明らかになった。

また、男性が経験することのできない“生理痛”に関する無回答の割合が多い（理解しようとしていない）ということが明らかになったが、この傾向は他の有痛症状の理解に影響することが示唆された。

文 献

- 1) 角倉弘行. 麻酔科医が知っておくべき痛みの評価の基礎知識. 日臨麻会誌. 2010 ; 30(3) : 430-437.
- 2) 厚生労働省ホームページ. 平成 22 年国民

生活基礎調査の概要 (1 自覚症状の状況)
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/3-1.html>

- 3) Merzack R, The McGill pain questionnaire, Major properties and scoring methods, Pain 3 ; 1975 : 277-299
- 4) Merzack R・Katz R, Pain measurement in persons in pain. In Textbook of Pain (4th Edition), Churchill Livingstone Edinburg ; 1999 : pp.409-426.
- 5) 平川奈緒美. 痛みの評価スケール. Anesthesia 21 Century. 2011 ; 13(2-40) : 4-10.
- 6) 熊沢孝朗, 波多野敬. 痛みを表現する言葉. 日本疼痛学界・日本ペインクリニック学界編. 標準痛みの用語集. 南江堂. 東京. 1999:250-261.
- 7) Merzack R. The short-form McGill pain questionnaire. Pain. 1987 ; 30 : 191-197.
- 8) 青山宏, 山口真人, 熊野宏昭, 他. SF-MPQ からみた慢性疼痛の鑑別診断. 慢性疼痛. 1998 ; 17 : 72-75.
- 9) 横田直正, 時村文秋, 田中純一, 他. 慢性疼痛患者に対する簡易型マッギル疼痛質問票の信頼性. 整・災外. 2005 ; 48 : 773-777.
- 10) 圓尾知之, 中江文, 前田倫, 他. 痛みの評価尺度・日本語 Short-Form McGill Pain Questionnaire2(SF-MPQ-2)の作成とその信頼性と妥当性の検討. PAIN RESEARCH. 2013 ; 28 : 43-53.
- 11) 柳堀厚, 伊藤元博, 山上英臣. 月経痛の評価法—Visual Analogue Scale を用いた検討—産科と婦人科. 1997 ; 64(4) : 561-568.
- 12) 武谷雄二. 月経のはなし 歴史・行動・メカニズム. 中央公論新社. 2012.

表1. 痛みを表現する言葉の理解

		できる		なんとなくできる		あまりできない		できない		無回答	
ズキンズキンと	男性	400	(76.3%)	109	(20.8%)	9	(1.7%)	5	(1.0%)	1	(0.2%)
脈打つ痛み	女性	102	(81.0%)	22	(17.5%)	2	(1.6%)	0	(0.0%)	0	(0.0%)
ギクッと走るよ	男性	285	(54.4%)	162	(30.9%)	59	(11.3%)	17	(3.2%)	1	(0.2%)
うな痛み	女性	74	(58.7%)	31	(24.6%)	16	(12.7%)	5	(4.0%)	0	(0.0%)
突き刺されるよ	男性	298	(56.8%)	168	(32.1%)	49	(9.4%)	7	(1.3%)	2	(0.4%)
うな痛み	女性	73	(58.0%)	41	(32.5%)	11	(8.7%)	1	(0.8%)	0	(0.0%)
鋭い痛み	男性	318	(60.6%)	157	(30.0%)	38	(7.3%)	8	(1.5%)	3	(0.6%)
	女性	62	(49.2%)	49	(38.9%)	14	(11.1%)	1	(0.8%)	0	(0.0%)
しめつけるよう	男性	289	(55.1%)	166	(31.7%)	59	(11.3%)	8	(1.5%)	2	(0.4%)
な痛み	女性	84	(66.7%)	35	(27.8%)	7	(5.6%)	0	(0.0%)	0	(0.0%)
食い込むような	男性	134	(25.6%)	159	(30.3%)	182	(34.7%)	47	(9.0%)	2	(0.4%)
	女性	40	(31.7%)	28	(38.1%)	32	(25.4%)	5	(4.0%)	1	(0.8%)
焼けつくような	男性	188	(35.9%)	145	(27.7%)	142	(27.1%)	45	(8.6%)	4	(0.8%)
	女性	43	(34.1%)	36	(28.6%)	41	(32.5%)	5	(4.0%)	1	(0.8%)
うずくような痛	男性	353	(67.4%)	137	(26.1%)	26	(5.0%)	6	(1.1%)	2	(0.4%)
	女性	86	(68.3%)	32	(25.4%)	7	(5.6%)	1	(0.8%)	0	(0.0%)
重苦しい痛み	男性	237	(45.2%)	174	(33.2%)	98	(18.7%)	15	(2.9%)	0	(0.0%)
	女性	66	(52.3%)	38	(30.2%)	18	(14.3%)	3	(2.4%)	1	(0.8%)
さわると痛い	男性	424	(80.9%)	80	(15.3%)	13	(2.5%)	7	(1.3%)	0	(0.0%)
	女性	100	(79.4%)	18	(14.2%)	4	(3.2%)	4	(3.2%)	0	(0.0%)
割れるような痛	男性	174	(33.2%)	149	(28.4%)	141	(26.9%)	56	(10.7%)	4	(0.8%)
	女性	46	(36.5%)	46	(36.5%)	25	(19.8%)	7	(5.6%)	2	(1.6%)
心身ともうん	男性	103	(19.7%)	156	(29.7%)	175	(33.4%)	88	(16.8%)	2	(0.4%)
	女性	39	(31.0%)	44	(34.9%)	34	(27.0%)	8	(6.3%)	1	(0.8%)
気分が悪くなる	男性	186	(35.5%)	195	(37.2%)	102	(19.5%)	39	(7.4%)	2	(0.4%)
	女性	56	(44.4%)	45	(35.7%)	21	(16.7%)	4	(3.2%)	0	(0.0%)
恐ろしくなるよ	男性	52	(9.9%)	90	(17.2%)	216	(41.2%)	166	(31.7%)	0	(0.0%)
	女性	12	(9.5%)	37	(29.4%)	49	(38.9%)	28	(22.2%)	0	(0.0%)
耐え難い、身のお	男性	108	(20.6%)	134	(25.6%)	151	(28.8%)	128	(24.4%)	3	(0.6%)
	女性	36	(28.5%)	34	(27.0%)	33	(26.2%)	22	(17.5%)	1	(0.8%)

表 2. 5つの有痛症状に関する経験の有無

「ある」「ない」「経験はないが症状のある人(患者以外)と身近によく接している」の3択で回答。

	男 性 (n=524)			女 性 (n=126)			経験のある人とよく接する
	ある	ない	経験のある人とよく接する	ある	ない	経験のある人とよく接する	
肩こり	403 (76.9%)	94 (17.9%)	23 (4.4%)	115 (91.3%)	8 (6.3%)	2 (1.6%)	
頭 痛	486 (92.7%)	31 (5.9%)	4 (0.8%)	122 (96.8%)	4 (3.2%)	0 (0.0%)	
生理痛	0 (0.0%)	443 (84.5%)	47 (9.0%)	116 (92.1%)	7 (5.6%)	1 (0.8%)	
腹 痛	488 (92.8%)	27 (5.1%)	1 (0.1%)	113 (89.7%)	8 (6.3%)	0 (0.0%)	
腰 痛	469 (89.5%)	36 (6.9%)	3 (0.5%)	116 (92.1%)	9 (7.1%)	0 (0.0%)	

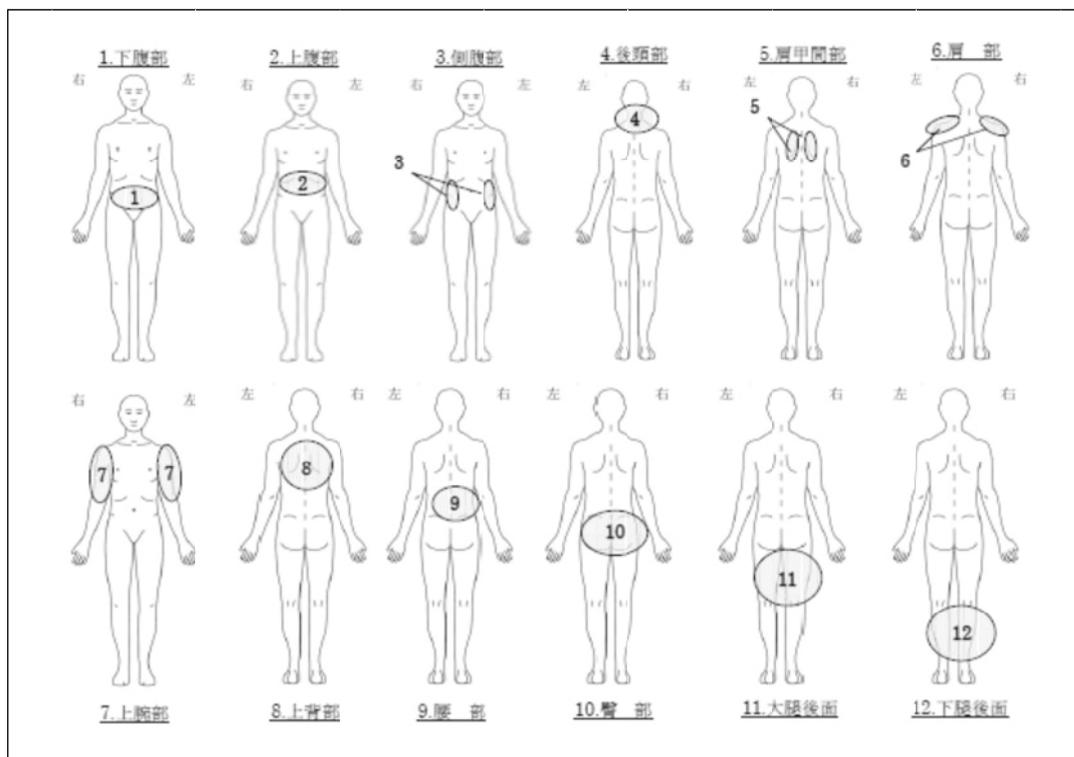


図 1. 質問紙

部位選択のための別紙。腹痛の診察において内科診断学では腹部を9区分もしくは4区分に、東洋医学では五行の関連から5部位に分けて、それぞれ内臓疾患や機能異常の診察に役立てている。しかし、今回はそれとは関係なく、単純におおまかな部位を選択できるものにし

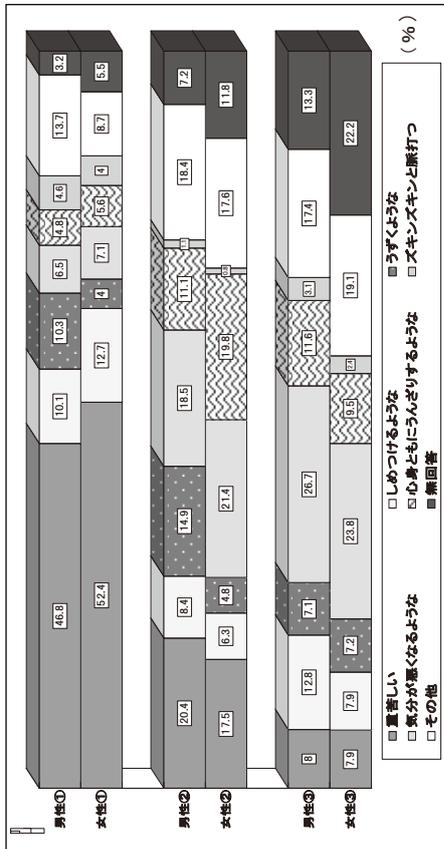


図2. “肩こり”をイメージする言葉の表現

- ① : 1 番目に選択された回答 ② : 2 番目に選択された回答
 ③ : 3 番目に選択された回答

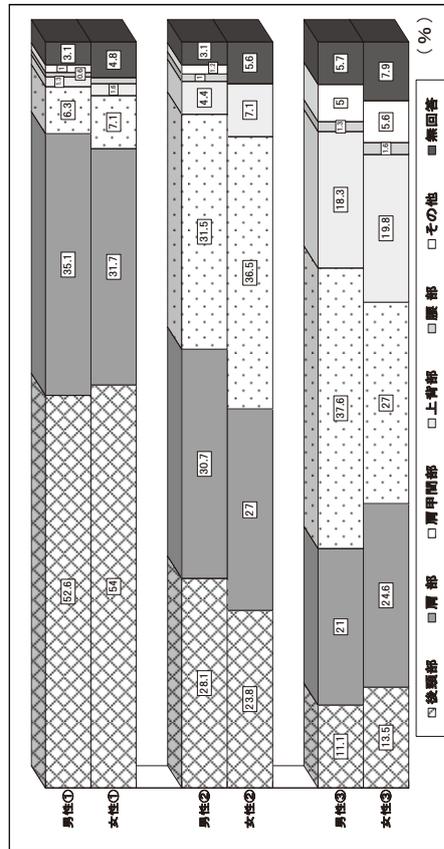


図3. “肩こり”をイメージする部位

- ① : 1 番目に選択された回答 ② : 2 番目に選択された回答
 ③ : 3 番目に選択された回答

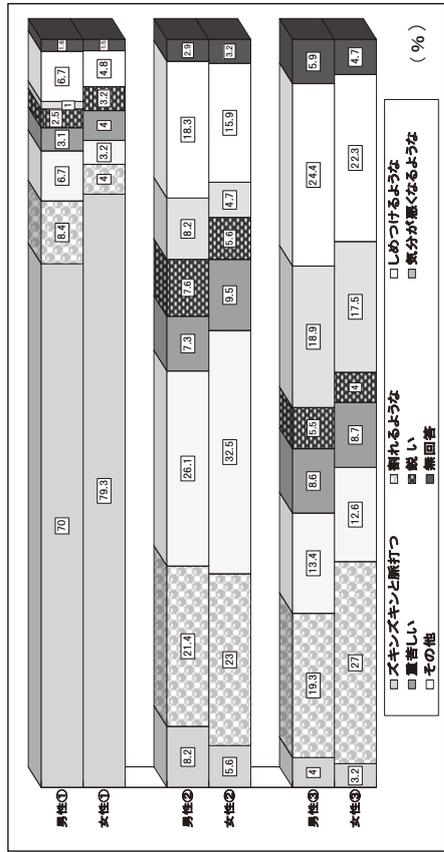


図4. “頭痛”をイメージする言葉の表現

- ① : 1 番目に選択された回答 ② : 2 番目に選択された回答
 ③ : 3 番目に選択された回答

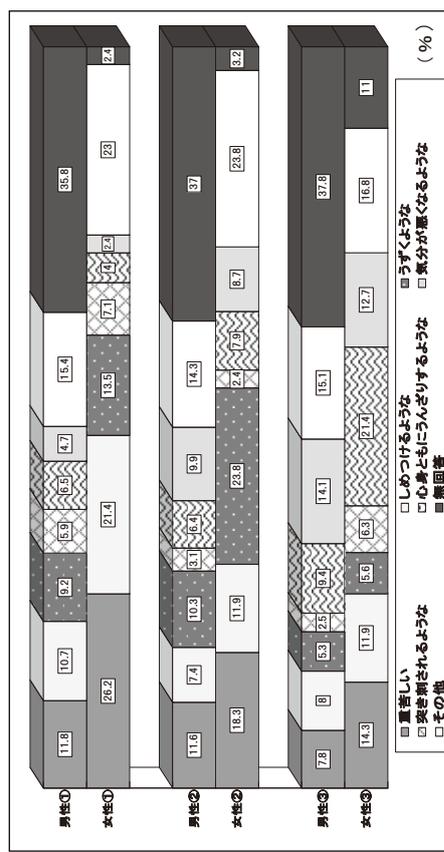


図5. “生理痛”をイメージする言葉の表現

- ① : 1 番目に選択された回答 ② : 2 番目に選択された回答
 ③ : 3 番目に選択された回答

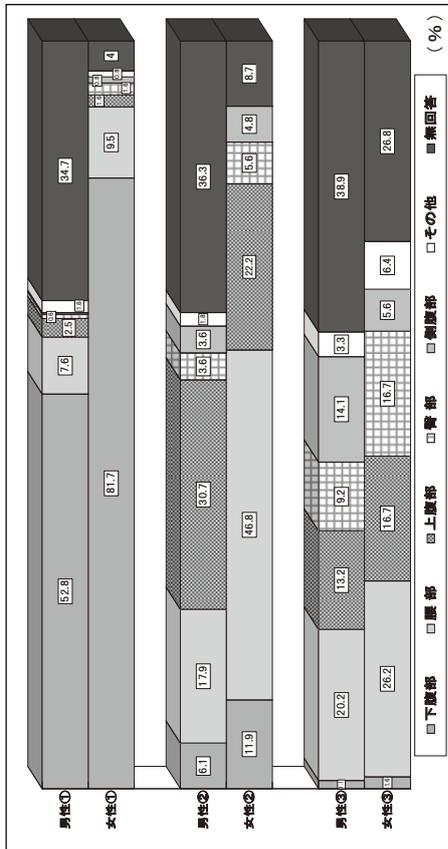


図 6. “生理痛”をイメージする部位

① : 1 番目に選択された回答 ② : 2 番目に選択された回答
③ : 3 番目に選択された回答

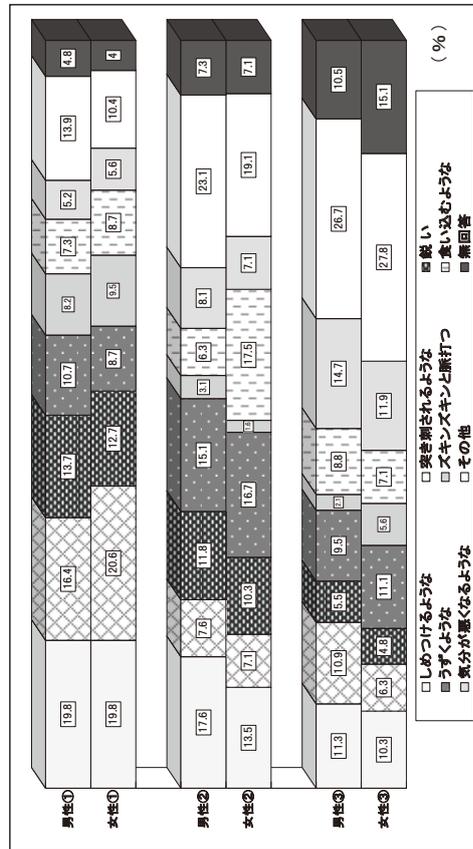


図 7. “腹痛”をイメージする言葉の表現

① : 1 番目に選択された回答 ② : 2 番目に選択された回答
③ : 3 番目に選択された回答

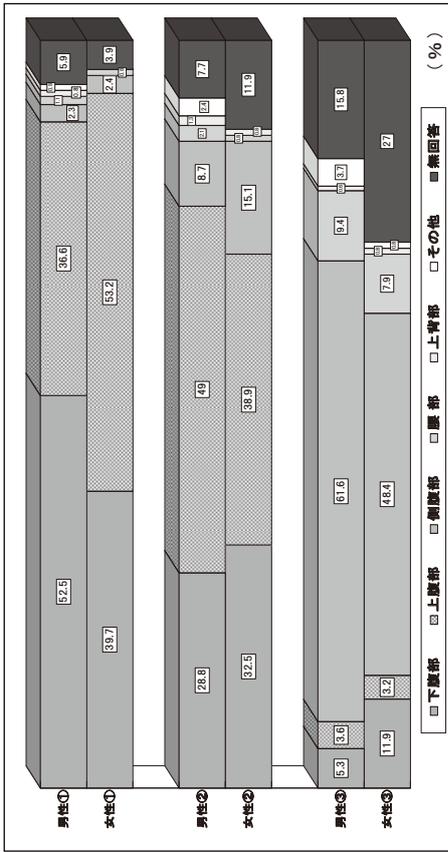


図 8. “腹痛”をイメージする部位

① : 1 番目に選択された回答 ② : 2 番目に選択された回答
③ : 3 番目に選択された回答

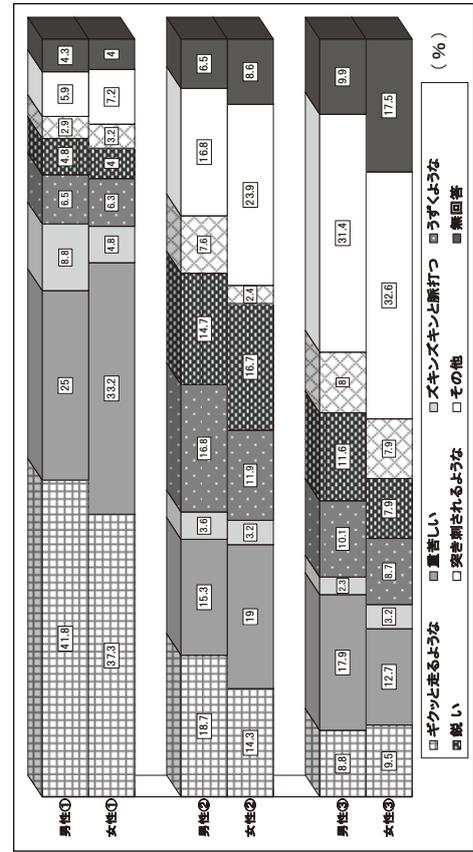


図 9. “腰痛”をイメージする言葉の表現

① : 1 番目に選択された回答 ② : 2 番目に選択された回答
③ : 3 番目に選択された回答

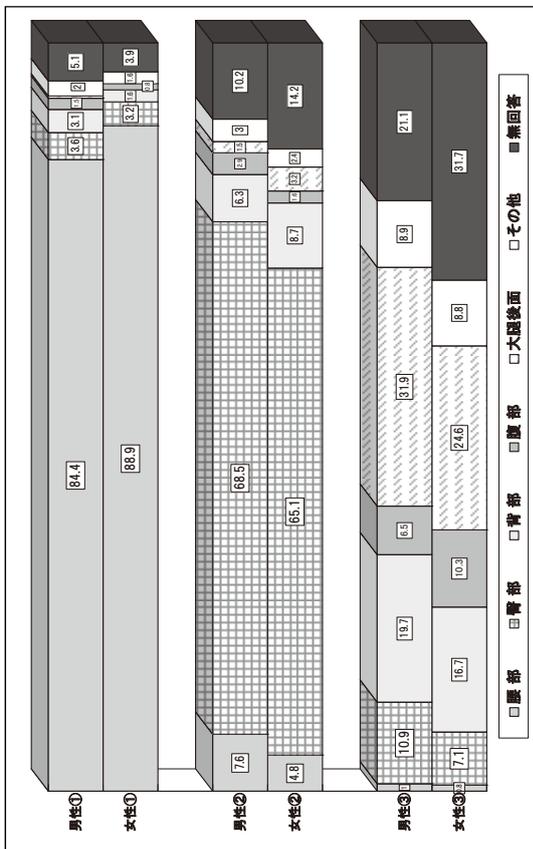


図 10. “腰痛” をイメージする部位

① : 1 番目に選択された回答 ② : 2 番目に選択された回答
 ③ : 3 番目に選択された回答

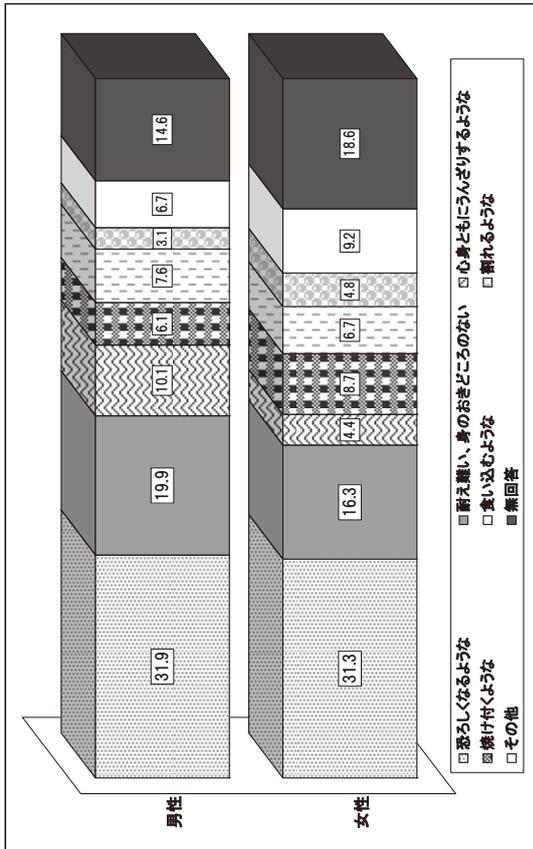


図 11. イメージ (想像) しにくい痛みの表現について
 学生の回答に質問の前半と後半で差異が無いか調査するために、
 表 1 と同様の内容について調査した。
 結果は、表 1 と同様であった。